

山田方谷晩年の思想の同時代評価

原信太郎アレシヤンドレ

山田方谷は若い頃から陽明学の信奉者として知られていたが、自身の信じるどころの「王學」を本格的に開示したのは晩年になってからであった。その学説は、当時の思想界において様々な反発を招いた。

当時の様子を方谷門下の岡本巍^{たかし}は「先師方谷山田先生、晩年大いに王學の蘊奥を發揮して聖道の晦塞を闡明するなり。…聞く者其の立言の新奇なるに驚き、或ひは疑ひて以て一氣の自然に順へば、則ち天理を并せて之を泯ぼし、茫乎として天則無からんと謂ひ、或ひは危ぶみて以て一氣の自然に順ひて天理を主とせざれば、則ち放縱暴戾に陥ると謂ひ、誹りて以て學術人を誤ると謂ふ者あり、訝りて以て異を立て奇を好むと謂ふ者あり、議疑百出し、至らざる無し」（「順一氣自然辨」、『陽明学』第119号、陽明学会、1918）と述べる。方谷の旧知で陽明学者として名のあった春日潜庵も、「畢竟山田ノ説ハ。荒唐ノ大話ヲ吐クノミ。」（吉田公平・森博「村上作夫の『東遊日記』について」『東洋古典学研究』第19集、広島大学、2005）と、齒牙にも掛けぬ言いようである。

方谷思想はなぜこれほどまでに酷評されたのか。換言すると、方谷を批判した陽明学者たちと方谷のいわゆる「王學」にはいかなる質的差異があったのか。幕末期、方谷の周囲には、吉村秋陽、東沢瀉、池田草庵、林良斎らを主なメンバーとする陽明学者のネットワークが築かれていた。そこでは黄宗羲『明儒学案』の明代思想史観に立脚するかたちで、見解の分岐はあるものの、おおむね聶豹、羅洪先、劉宗周らが高く評価され、それら陽明後学の研究と消化を通じて自らの思想を立ち上げる営みがなされていた。方谷も当然、陽明後学の文献は研究したのであろうが、思考の行き着く先は上記の陽明学者たちと相当に色彩を異にするものであったように思われる。

本発表では方谷思想の同時代評価と、かかる評価のなされる原因に着目し、幕末維新时期陽明学の展開の一端を明らかにしたい。